50mLの全量フラスコ⑴から⑶までを用意し、⑴に試料溶液を、⑵に標準液を、⑶に空試験液をそれぞれ25mLずつ全量ピペットを用いて量り、50mLの全量フラスコに入れ、それぞれにつき、次の操作を行う。１mol／Ｌ塩酸５mL及び新たに調製した亜硝酸ナトリウム溶液（１→1,000）５mLを全量ピペットを用いて加え、振り混ぜた後、２分間放置する。次に、新たに調製したスルファミン酸アンモニウム溶液（１→200）５mLを全量ピペットを用いて加え、振り混ぜ、３分間放置した後、新たに調製したＮ－（１－ナフチル）－エチレンジアミン二塩酸塩溶液（１→1,000）５mLを全量ピペットを用いて加え、振り混ぜ、10分間放置し、さらに、水を標線まで加えて50mLとする。⑴及び⑵の溶液につき、⑶の溶液を対照液として波長540nm付近の極大波長における吸光度A_T及びA_Sを測定する。

エトパベート（$C_{12}H_{15}NO_4$）の量（mg）

＝エトパベート標準品の量（mg）×$\frac{A_T}{A_S}$×$\frac{1}{5}$

スルファキノキサリン　スルファキノキサリン（$C_{14}H_{12}N_4O_2S$）約0.05ｇを含む量の本品を有効数字３桁まで量り、その数値を記録し、水70mL及び0.5mol／Ｌ水酸化ナトリウム試液10mLを加え、10分間振り混ぜた後、250mLの全量フラスコに入れ、水を標線まで加えて250mLとする。これを２分間放置し、必要ならば遠心分離した後、上澄液10mLを全量ピペットを用いて量り、１mol／Ｌ塩酸10mLを入れた200mLの全量フラスコに入れ、水を標線まで加えて200mLとし、試料溶液とする。別に、スルファキノキサリン標準品を乾燥し、その約0.05ｇを0.0001ｇの桁まで量り、その数値を記録し、水70mL及び0.5mol／Ｌ水酸化ナトリウム試液10mLを加えて溶かし、250mLの全量フラスコに入れ、さらに、水を標線まで加えて250mLとする。この溶液10mLを全量ピペットを用いて量り、１mol／Ｌ塩酸10mLを入れた200mLの全量フラスコに入れ、水を標線まで加えて200mLとし、標準液とする。また、別に、0.5mol／Ｌ水酸化ナトリウム試液10mLに水を加えて250mLとし、この溶液10mLを200mLの全量フラスコに入れ、１mol／Ｌ塩酸10mL及び水を標線まで加えて200mLとし、空試験液とする。50mLの全量フラスコ⑴から⑶までを用意し、⑴に試料溶液を、⑵に標準液を、⑶に空試験液をそれぞれ10mLずつ全量ピペットを用いて量り、それぞれにつき、次の操作を行う。

１mol／Ｌ塩酸５mL及び新たに調製した亜硝酸ナトリウム溶液（１→1,000）５mLを全量ピペットを用いて加え、振り混ぜた後、２分間放置する。次に、新たに調製したスルファミン酸アンモニウム溶液（１→200）５mLを全量ピペットを用いて加え、振り混ぜ、３分間放置した後、新たに調製したＮ－（１－ナフチル）－エチレンジアミン二塩酸塩溶液（１→1,000）５mLを全量ピペットを用いて加え、振り混ぜ、10分間放置し、さらに、水を標線まで加えて50mLとする。⑴及び⑵の溶液につき、⑶の溶液を対照液として波長545nm付近の極大波長における吸光度A_T及びA_Sを測定する。

スルファキノキサリン（$C_{14}H_{12}N_4O_2S$）の量（mg）

＝スルファキノキサリン標準品の量（mg）×$\frac{A_T}{A_S}$

⑷　保存の方法の基準

密閉容器に保存すること。